

目 次

はじめに	1
東南アジアにおけるイスラームへの視点—イスラームの普遍性と地域の多様性—	3
青山 亨(東京外国語大学外国語学部)	
マレーシアのイスラーム法制における「自由」と「制約」—イスラーム教義と現代的価値との「整合」への試み—	15
多和田裕司(大阪市立大学大学院文学研究科)	
インドネシアにおけるイスラームのベクトル—シャリーア適用問題をめぐって—	29
小林寧子(南山大学外国語学部)	
イスラームの制度化と宗教変容—マレーシア・サバ州, 海サマ人の事例—	45
長津一史(京都大学東南アジア研究所)	

はじめに

本書の生い立ちは2003年12月13日に鹿児島大学多島圏研究センターで開催された多島域フォーラム・シンポジウム「東南アジアにおけるイスラームの現在」にある。シンポジウムの発表者は、多和田裕司（大阪市立大学大学院文学研究科）、長津一史（京都大学東南アジア研究所、発表時は京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）、小林寧子（南山大学外国語学部）の3氏であった。これらの発表についてマレーシアをフィールドとする文化人類学者である鹿児島大学法文学部の桑原季雄氏に総括的なコメントをしていただいた。本書はシンポジウムの報告をそのまま記録するという形はとらず、コメントとそれにつづく討論の結果を踏まえて、報告者の方々には新たに稿をおこしていただき、それに対して全体への序論をシンポジウムの企画者であり本書の編者となった青山が書き加える形で完成したものである。

今回のシンポジウムを企画するにあたっては、以下の4点を考慮している。

まず初めに、多島圏研究センターでは、その前身の南太平洋海域研究センターであった1991年に「東南アジアのイスラーム—教育、農村、海洋民—」というテーマでシンポジウムを開催していることである。この時の報告は、西村重夫による「インドネシアのイスラーム：教育」、桑原季雄による「マレーシアのイスラーム：農村」、床呂郁哉による「フィリピンのイスラーム：海洋民」の3本であり、その記録は本書と同じく『南太平洋海域調査研究報告』22号にまとめられている。この報告の序文には、東南アジア研究におけるイスラーム研究は「従来あまり深く結びつけられて考えられなかったテーマ」であるという指摘が見られるが、その後、東南アジア研究に携わる日本の研究者の間でイスラームに対する関心が高まってきたことは確かに実感できることである。先のシンポジウムから12年が経過した今こそ、東南アジアのイスラームに対する研究者の認識の深まりを検証するよい節目であろう。

次に、2001年の9月11日同時多発テロ事件に始まり、アフガニスタン侵攻、そしてイラン戦争に続く一連の出来事の流れの中で、日本社会一般のイスラームに対する関心は高まったが、それは、往々にして中東を中心とした、しかも、テロリズムという極限的な行為を前提としたイスラームの理解となっているという現状への危惧である。奇しくも1991年のシンポジウムが開かれたときも湾岸戦争の最中であった。しかし、これは何もこのような外的な要因に急かされてそのつどのシンポジウムが開かれたという意味では決してない。イスラーム社会は他のどの社会とも同等の資格でこの地球上に存在する社会であり、イスラーム社会についての研究もまた弛まなく行われるべき性格のものである。だからこそ、暴力と危険にのみ彩られたイスラーム理解が流通しがちな時に、バランスのとれた視点からイスラーム社会の現実を知ってもらう機会を社会一般に提供する責務が研究者にはあろう。先のシンポジウムの趣旨説明にも「一般に近寄りがたいと思われているイスラーム世界を、地理的に近い東南アジアから接近して考えよう」と述べられているが、これは今でも有効な考えだと思われる。

第三に、先のポイントでも触れられたが、東南アジアのイスラームを説明する場合に、国際関係とかいった大局的な語りには終始するのではなく、東南アジアの人々に

とってイスラームとは何か、東南アジアのムスリムはイスラームに何を求めているのか、彼らにとってイスラームを信奉するということがどういう意味をもっているのかという、そこに住む人々の視点からイスラームを考えてみたいということである。これは地域研究の立場に立つ場合には必ず確保しておくべき視点であろう。

最後に、この地域研究の視点を生かすために、東南アジアのイスラームの中にもまた多様なイスラーム社会があり、イスラームに対する多様な考え方があるのだということをはっきりと示すことである。1991年のシンポジウムにおいてインドネシア、マレーシア、フィリピンという東南アジア島嶼部の三つの国が選ばれたのも、このような多様性を考慮したためであるが、今回はより踏み込んで、人々とイスラームとの関係のあり方の違いに焦点をあてて多様性を浮き彫りにすることを試みた。というのも、多様性が多様であることを認識するためには、多様性を相対化する共通の視座が必要だからである。もしそうでなければ、多様な事象が多様なままで放り出され、東南アジアのイスラーム世界を語るということ自体が、意味のある行為として成り立たないことになるであろう。むしろ、イスラームを共有する社会である以上、そこには共通性があるべきであるが、そこで問題となるのは東南アジアという地域におけるその表現である。具体的には、国教として制度化されたマレーシアのイスラーム、政治から分離されたものとしての宗教の位置づけが議論されているインドネシアのイスラーム、そして、国としては再びマレーシアに戻るが、今現にムスリムになることによって自らのアイデンティティを確立しようとしている、「周辺」の人々にとっての獲得すべき理念としてのイスラーム、の三つの視点から東南アジアのイスラームを描くことを試みた。

以上にあげた趣旨がどこまでシンポジウムの成果として活かされたかの判断は読者に委ねたいが、それぞれの地域のムスリムが、自分たちがムスリムであること/ムスリムになることに、いかなる希望/未来/理想を託しているのかということをはっきりとすることによって、東南アジアに存在する、いくつかの代表的なイスラームのあり方について読み手の理解がいささかなりとも深まれば、このシンポジウムの目的は達成されたと言ってよいであろう。

シンポジウムの開催にあたっては多くの方々のご協力をいただいた。報告者の先生方、コメントを出していただいた研究者、討論に参加していただいた研究者・市民の方々、そしてシンポジウムの準備と円滑な開催を助けて頂いたセンターの兼務教員の方々に感謝を申し上げたい。シンポジウムを企画し本書の編者となった青山は10月に東京外国語大学外国語学部へ異動したため、今回のシンポジウムは9年間勤務した多島圏研究センターでの仕事を締め括るものとなった。諸般の事情から出版が遅れたが、報告者ならびにセンターのご協力を得てここに南太平洋海域調査報告シリーズの1冊として出版することができたことを心から喜びたい。

東京外国語大学外国語学部
青山 亨